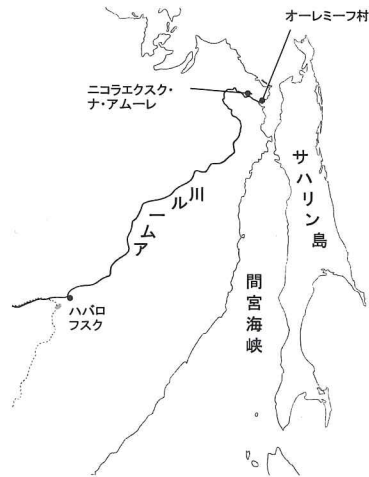


アムール河口の町で 北方少数民族の歓迎を受けた

さいとう
齊藤 マサヨシ (写真家)



二〇一二年七月、私は間宮林蔵の足跡を辿って、アムール川をハバロフスクからニコラエフスク・ナ・アムールまで船で下った。ハバロフスクからニコラエフスク・ナ・アムールまでは約九三〇キロメートルで高速の水中翼船が週に二往復していた。午前七時、ハバロフスクを出発した高速船「メテオル」は、途中十カ所ほどの町や村に立ち寄って、日付が変わって午前一時、ニコラエフスク・ナ・アムールに到着した。

十八時間というアムール川の船旅は想像していた以上に快適で、楽しいものであった。アムール川は、モンゴル高原を源流として中国、ロシアを流れる約四三〇〇キロメートルの大河だ。中国では黒水とか黒竜江と呼ばれ、流域ではサカリン、アモレ、アミュレなどと呼ばれていたようだ。とにかくこの地域に古くから暮らす北方少数民族の人々にとっては母なる川だ。

ニコラエフスク・ナ・アムールには、かつて日本の領事館もあり、多くの日本人が暮らしていた。この町で音楽学校の校長先生をしているエレーナさんが博物館を案内してくれた。

館内には、ニブフやナーナイ、ウリチなど北方少数民族の資料が数多く展示されている。とくにナーナイの資料展示は、サハリンでは数少ないので興味深かった。

館内を一回りした後、隣接した図書館に案内された。ホールには民族衣装で着飾った若者たちが勢ぞろいしていた。

エレーナさんは「これから、あなたを歓迎する伝統の踊りを見せます」と、ホールの中央に置かれた椅子に案内してくれた。

さっそく、ニブフの若い女性が民族衣装で登場。両手を広げてひらひらと優雅に踊りだした。エレーナさんは「あなたが写真を撮っているオオワシの踊りですよ」と解説してくれた。私は感激のあまりシャッターボタンを押す手が止まってしまいうぐらいであった。

次に民族衣装を着た子供たちがたくさん登場。川や森に生きる動物たちの題材にしたミュージカルが始まった。それぞれの動物を演じる子供たちの表情はとても豊かで、私の心に深く刻まれた。

図書館を後にした私は、アムール川の河口先端部近くにあるオーレミーフ村を訪ねた。この村はニブフの村だ。私が訪ねた日、村に人影は無く、時間が止まったかのようであった。エレーナさんによると、「若い人は村を出て、残っているのは老人だけです」とのことであった。ここにも過疎化の波が襲っていた。

〈写真説明〉北方少数民族の衣装で着飾った子供たちが、川や森に生きる動物たちの伝承をミュージカル仕立て披露してくれた。二〇一二年七月、ロシア・ハバロフスク地方ニコラエフスク・ナ・アムールにて撮影。